

この60年間で10歳若返った日本のシニア世代

経営環境研究部 研究員 世良多加紘(せら たかひろ)

どこからが「高齢者」なのか

65歳以上の高齢者が総人口に占める割合である「高齢化率」は、2015年に26.6%になりました。国立社会保障・人口問題研究所によると、今後も上昇を続け、2065年には38.4%に達すると推定されています(資料1)。

高齢化率の考え方は、1956年に国際連合によって定められたもので、65歳以上を「高齢者」と位置づけ、その割合が7%を超える社会を「高齢化社会」としました。この高齢者の定義は1956年以降、一度も変わっていません。しかし、当時の65歳と現在の65歳を同じ高齢者と呼べるのでしょうか。

「余命等価年齢」からみる若返り効果

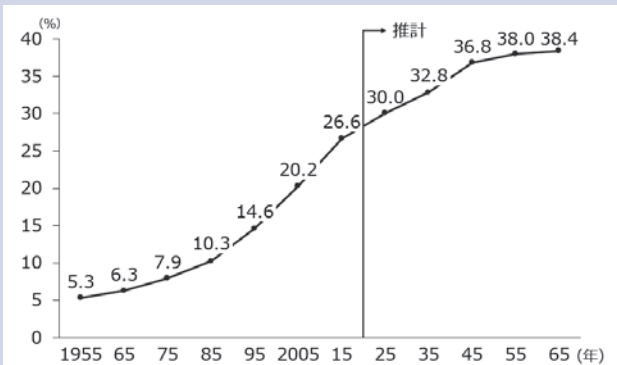
「最近のシニア世代は元気だ」とよくいわれます。国連によって「高齢者」が定義されたほぼ同時期の1955年と比べると、日本人の平均寿命は男性で約17年、女性では約19年も延びました。たとえ同じ年齢であっても、残された人生の長さでみれば、昔より相対的に若くなったといえます。

これを数値で表したものが、「余命等価年齢」です(資料2)。1955年当時の65歳の平均余命を基準として、同じ平均余命になる年齢を示しています。わかりやすくいうと、「2015年の75歳は、1955年の65歳と同じくらい若い」ということです。

若返り効果を反映した新しい高齢化率

余命等価年齢によって高齢者を再定義すると、高齢化率も変わります。高齢者の線引きは65歳ではなく、2015年には約75歳、2065年には約80歳となるため、高齢化率は大きく下がります(資料3)。2015年には15ポイント下がり、これは1,908万人に相当します。今後も高齢化が進む日本においては、シニア層が社会で活躍できるよう、情報提供や教育活動を通じて彼らの職業能力を維持向上させていくことがますます重要になるといえるでしょう。

資料1 日本の高齢化率



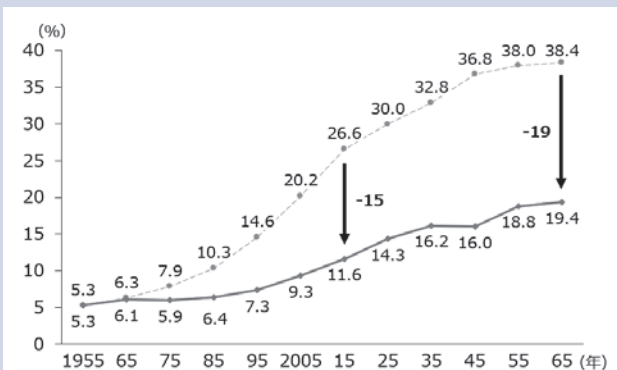
(出所) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」および同「人口統計資料集」より筆者作成

資料2 余命等価年齢(1955年時点65歳基準)

男性		女性	
西暦	余命等価年齢	西暦	余命等価年齢
1955年	65.00歳	1955年	65.00歳
1965年	65.11歳	1965年	65.58歳
1975年	67.84歳	1975年	68.12歳
1985年	70.39歳	1985年	71.04歳
1995年	71.75歳	1995年	73.20歳
2005年	73.66歳	2005年	75.77歳
2015年	75.31歳	2015年	76.88歳
2025年	76.36歳	2025年	78.01歳
2035年	77.18歳	2035年	78.88歳
2045年	77.87歳	2045年	79.61歳
2055年	78.46歳	2055年	80.23歳
2065年	78.97歳	2065年	80.77歳

(出所) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」および同「人口統計資料集」より筆者作成

資料3 余命等価年齢で再計算した高齢化率(実線)



(出所) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」および同「人口統計資料集」より筆者作成